PC-49.

RFA後の腫瘍部以外の副所見と術後経過の関連性

(内科学第五)
○下河辺宏一，溝上裕士，白石貴久，中村　浩，大坪十四哉，松岡　健
(霞ヶ浦・放射線医学)
斎藤和博，小竹文雄，橋本剛史
(放射線医学教室)
伊藤直記

【目的】経皮的ラジオ波燃灼術 (Radiofrequency Ablation : 以下RFA) 後の経過観察CT所見と術後経過の関連性を検討し，臨床症状の程度・遷延の予測や合併症の程度および入院期間の予見ができるか評価をする．

【対象及び方法】対象はRFAを施行した16例．男性15例，女性1例，平均年齢63.4歳であった．施行回数はのべ27回．4例にRFA施行前にTAEが施行されている．RFAは平均1.23回施行された．RFA後における最初の経過観察CT撮像は平均6.5日後に施行した．その後，適時，経過観察CTが施行されている．RFA施行前のCTとRFA施行後のCT所見を内科医1名，放射線科2名でretrospectiveに評価した．

【結果】CT所見は，腎周囲腔脂肪濃度の上昇3例，腎周囲腔脂肪濃度の上昇及びGerota筋膜の肥厚1例，穿刺経路近傍の脂肪濃度上昇2例，腹壁肥厚2例，穿刺経路の低吸収域4例，肝被膜下実質の低吸収域1例，胆嚢壁肥厚3例，胸水4例，腹水5例，局所の液体貯留1例，RF施行部を含む肝区域の肝内胆管拡張1例，変化が認められないもの3例であった．臨床症状は発熱，疼痛が認められた．臨床検査値は一過性の肝酵素の上昇・炎症反応の上昇が認められた．臨床症状，臨床検査値の異常の程度が強いもの，また遷延するものは，RF施行部を含む肝区域の肝内胆管拡張，胆嚢壁の肥厚，腎周囲腔脂肪濃度の上昇，Gerota筋膜の肥厚，穿刺経路近傍の脂肪濃度上昇が認められたもので，その傾向が強く認められた．さらに，腹壁肥厚を認めた例では経過観察中に播種が認められた．

【結語】RFA後の経過観察のCT施行に関しては，治療部位以外の所見に着目する事で臨床症状の程度・遷延が予測可能であり，これらの評価も併せて評価することで，入院期間及び合併症の程度が予見できるものと考える．

PC-50.

八王子医療センターで施行された生体部分肝移植3例のドナーの検討

(外科学第五)
○岩本　整，松野直徒，中村有紀，濱耕一郎，鳴海康方，内山正美，小﨑浩一，出川寿一，菊池賢治，長尾　桓
(内科学第四)
森安史典
(外科学第三)
斎藤　準，鈴木芳明，葦沢龍人，小柳恭久

当センターで施行された3例の生体部分肝移植におけるドナーについて検討を行った．

【症例1】61歳男性，自己免疫性肝炎に肝細胞癌を合併した姉に対して肝右葉を移植した．移植肝重量は460 g，レシピエントの体重に対する移植肝重量比(GRWR) は0.94%であった．術後の総ビリルビン (T-Bil) 値の最高値は5.0 mg/dlであり退院時には正常値となった．術後第13病日に退院した．術後3ヶ月目の腹部CTで，切除前の全肝の90%以上の再生を認めた．また右上腕の知覚鈍麻を認めている．

【症例2】29歳女性，原発性胆汁性肝硬変の母に肝右葉を移植した．移植した肝重量は545 g, GRWRは1.12%, 肝動脈は3分岐型であり肝移植の際，前区域，後区域の2本をそれぞれ，吻合した．術後のT-Bil値の最高値は2.2 mg/dlであったが以後軽快し術後第12病日に退院した．

【症例3】43歳男性，原因不明の肝硬変の妻に肝右葉を移植した．移植した肝重量は838 g, GRWRは1.28%，門脈が3分岐型であり，肝移植の際，門脈を2穴で吻合した．術後最高T-Bil値は3.0 mg/dlであったが以後軽快し第11病日に退院した．

【結語】当センターで施行された生体部分肝移植のドナーは全て肝右葉を用いたが経過順調で重篤な合併症は認めなかった．